815
Su73
(H10)

日本語の語順の原理と文の談話機能に関する基礎研究

（課題番号　08837002）

平成８年度～平成10年度文部省科学研究費補助金　基盤研究(C)(2)
研究成果報告書

平成11年３月10日

研究代表者　砂川有里子
（筑波大学文芸・言語学系助教授）

寄贈
砂川有里子氏
平成　年　月　日

99600973

はしがき

本書は、平成８年度から１０年度までの３年間にわたって文部省科学研究費基盤研究(C)(2)の助成を受けて行った「日本語の語順の原理と文の談話機能に関する基礎研究」の研究成果をまとめた報告書である。

本研究の研究組織、および活動内容の概要を以下に記載する。

・・・・・・・・・・・・・・・　研究組織・研究内容　・・・・・・・・・・・・・・・

研究組織

研究代表者　砂川有里子（筑波大学文芸・言語学系助教授）

研究経費

平成８年度	８００千円
平成９年度	７００千円
平成１０年度	７００千円
計	２２００千円

研究発表

１．口頭発表

（１）Yuriko Sunakawa 'Japanese Discourse Analysis: Copular Sentences in Written Discourse'

The Linguistic Circle of Ljubljana University, 3 March 1997.

（２）Yuriko Sunakawa 'Word Order of Japanese Copular Sentences'

The Tenth National Conference of Japanese Studies Association of Australia, 7 July 1997.

２．学会誌等

砂川有里子「日本語コピュラ文の談話機能と語順の原理－『ＡがＢだ』と『ＡのがＢだ』構文をめぐって－」

『文藝言語研究（言語篇）』　　３０号　１９９６年９月

目次

語順と情報の流れ－機能主義的な語順研究の展望－

砂川有里子 …… 5

Word Order of Japanese Copular Sentences

Yuriko Sunakawa …… 21

機能主義的な語順研究に関する参考文献一覧

砂川有里子 …… 31

語順と情報の流れ
－機能主義的な語順研究の展望－

砂川有里子
筑波大学文芸・言語学系
sunakawa@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

0　はじめに

言語によるコミュニケーションの重要な役割のひとつは、情報の伝達である。ある情報を伝えるとき、話し手は、言いたい内容をなるべく分かりやすく、しかも効果的に伝えるための表現を模索する。これまでに交わされた話の流れやその場の状況を踏まえて、自分の意図が十分に伝わりそうな表現を、数多くの可能な表現の中から選択しようとするのである。このような選択は、意識的に行われることもあるが、日常の場面では全く意識せずに行われていることのほうがはるかに多い。言いたいことが正しく伝わっていないことを知って自分の表現不足に気づいたり、相手に指摘されて表現の選択に失敗したことに気づくという経験は、誰しも少なからず持っているはずである。

ある内容を伝達するのに、どのような語やどのような構造の文を選択するかという問題、すなわち情報のパーケージング（Chafe 1976:28）にかかわる問題は、文の構成要素の配列という語順の問題とも深く関連する。聞き手にとって負担の少ない情報の配列順序は、すでに前提となっている事柄を踏まえて新たな情報をつけ加えるというあり方であろう。旧情報を表す要素から新情報を表す要素へという配列が多くの言語において最も普通の文のありかたであると言われるが、このことは、文の構造が人間の認知の営みによって制約を受けるものであることを物語っている。

しかし、その一方で、文の構造には人間の認知や身体的な制約にとらわれない恣意的な記号としての側面や認知的・身体的な制約では説明の付かない言語独自の制約があることも事実である。自然言語の語順は、このようないくつもの要因が複雑にからみあうなかで決定されており、その関係を解きほぐすのは

容易ではない。これまでに行われてきた語順の研究が、いくつもある要因のうちのある側面だけに着目したものに限られているのも、その複雑なありようのためである。

語順の研究には大きく分けて、基本語順の研究と特定語順の研究という二つの流れがある。基本語順の研究とは、各言語の基本的な語順によって世界の言語の類型化を試みるもので、主語・目的語・動詞の語順を基準にしたＳＯＶ言語やＳＶＯ言語などの類型がよく知られている（Greenberg 1966）。特定語順の研究とは、基本語順から逸脱した語順も含めて、ある特定の構成要素の配列が生成される要因を究明しようとするもので、多くは個別言語の記述を行うものであるが、語順にかかわる普遍的な文法規則や原理を求めようという動機に支えられている場合が多い。この特定語順の研究には、さらに次の二つの異なった立場がある。ひとつは基本語順とは別の配列を持つ文が生成される文法規則を明らかにしようとするもの、もうひとつはある特定の配列を持つ文が存在する存在論的・認知的な動機を明らかにしようとするものである。これらの二つのアプローチは、人間の認知の営みや身体的な制約に束縛されない自律した記号体系としての側面を探求しようとする立場と、生物としての人間の制約に影響を受けた記号体系としての側面を探求しようとする立場であると言うことができる。言語の形式的・文法的な側面に着目する立場と機能的・語用論的な側面に着目する立場と言い換えてもいいだろう。

本稿では、以上に述べたうちの機能的・語用論的な立場に立った語順研究を概観し、問題点を整理することを目的とする。以下はこの問題を論じる際に必要な基本的な用語を解説する中で、関連する先行研究を紹介していくことにしたい。

１　新情報と旧情報

１．１　テーマとレーマ

すでに述べたように、聞き手に負担の少ない伝達のありかたには情報の提示の仕方が大きくかかわってくる。この点に早くから注目したのがマテジウスをはじめとするプラーグ言語学派である。プラーグ学派の功績は、情報伝達にかかわるコミュニケーション機能を反映させるものとして文の構造を記述しようとした点にある。

人間のコミュニケーションは、すでに述べられた事柄に新たな情報が付け加わることによって、時系列に沿って展開して行く。その際に用いられる表現には、この展開に大きく寄与する部分とそれほどでもない部分がある。ファーバスはコミュニケーションの展開に寄与する力をコミュニケーション推進力(communicative dynamism)と名付け、その力の大きさによって、文をテーマ(theme)とレーマ(rheme)に区分した(Firbas 1964)。テーマとは、コンテクストや話し手と聞き手の共有知識から復元可能な情報、すなわち旧情報を表す部分で、文の中でのコミュニケーション推進力は最も低い。それに対して、コミュニケーション推進力が最も高い部分をレーマと呼び、そこでは聞き手に新たに伝えるべき新しい情報が伝達されるとした。さらに、テーマとレーマのどちらにも属さない中間的な表現は移行部(transition)と名付けられた。

このように、テーマ・レーマの区分と情報の新旧の区分とは多くの場合対応する。しかし、旧情報とテーマ、新情報とレーマが同一のものと認められない場合もある。例えば、新幹線と飛行機とどちらの方が早く着くかという議論をしているときに「新幹線の方が早い」といった場合を考えてみよう。この文の「新幹線」は直前の話題になっている語で、その意味では旧情報であるが、テーマではなくレーマを構成するものである。このような現象も取り込むためには、先行文脈で触れられているかどうかという側面とは別に、テーマとレーマの関わりの中で新情報としての資格を持つかどうかという側面も考える必要があるのである(Daneš 1974:111)。以上の議論からも分かるように、文のコミュニケーション機能にかかわるテーマ・レーマという概念は、新情報か旧情報かという単純な二分法では扱いきれない問題を提起している。そして、さらにこの問題を複雑にしているのは、プラーグ学派の考えを受け継いだ研究者たちが、テーマ・レーマとは微妙に規定の異なる類似の概念を提起しているという点である。その後の研究でトピック・フォーカス、あるいはトピック・コメントなどの用語が用いられることがあるが、これらはテーマ・レーマと同義に、あるいは様々な程度に異なって用いられ、混乱を招いている。この問題に関してここでこれ以上論じるゆとりはないが、ランブレヒトが詳しい解説を試みているので参照されたい(Lambrecht 1994:117ff.)。

さて、プラーグ学派の提起した重要な問題は、時系列に沿って線条的に発せられる文のなかで、テーマとレーマがある配列をなしているという指摘である。すなわち、比較的語順が自由なチェコ語のような言語ばかりでなく、文法によっ

て語順が強く制約されている英語などの言語の場合にも、テーマからレーマへという配列が中立的・客観的な語順として認められ、強調的・主観的なレーマからテーマへという語順に比べてより頻繁に見られる無標の語順であるとしたのである。

１．２　前提と焦点

一方、プラーグ学派の立場と異なった理論背景を持つものとして、命題内容を持った要素を情報構造の単位とする捉え方が、生成文法の流れを汲む研究の中で確立している（Chomsky 1971, 西山1979, Prince 1986 など)。たとえば、次の文が'Who broke the window?' という質問に答えるものとして用いられた場合を考えてみよう。

(1) John broke the window.

この文は、'X broke the window.'という前提命題（presupposition またはopen proposition）とJohnという焦点（focus）とからなると考えられる。この場合、話し手は'X=John'という命題を新しい情報として伝えていることになるわけである。すなわちこの立場の新情報・旧情報という概念は、文の表す命題内容に含意される命題レベルの単位として認められる。その文がどの要素を焦点とするかによって、文の構成要素は新情報にかかわる部分と旧情報にかかわる部分に区分されるのである。

この立場で重要なのは、情報的な価値という問題である。すなわち、文の中のある要素が聞き手にとってどれだけ価値のある情報を伝えているか、ということで、(1) の文では'X=John' という命題が最も聞き手に伝えたい内容であるのだから、'John' の部分が情報的に最も高い価値を持つことになる。つまり、新情報というのは、文の要素の中で最も情報価値の高い部分、旧情報というのはそれ以外の部分、と言い換えることができる。文の中での相対的な情報価値に応じた概念であるため、ガンデルはこの立場の新・旧を「相対的意味(relational sense)」による区分であると名付けている(Gundel 1988)。

１．３　意識状態と言語形式

以上の捉え方とは別に、ある表現の指示対象に対する意識の活性化の状態とい

う観点から新情報・旧情報の概念を捉えようとする立場もある(Chafe 1976, Prince 1981 など)。この立場は指示対象の意識状態に応じた区分であるため、先に述べた「相対的意味」に対して、「指示的意味(referential sence)」による区分と呼ばれている(Gundel 1988)。

チェイフは話し手が発話する目的は、聞き手の意識の活性化の状態を変化させることにあるとする(Chafe 1987:25)。コミュニケーションの場面において我々が意識に留めておけるのは、ほんのわずかな情報に限られる。人間の心の中には膨大な量の知識や情報が記憶として蓄えられているが、それらは常に活性化された状態にあるわけではなく、長期記憶として不活性な状態でストックされている。ある発話がなされたときにはそのうちのごく一部の情報が活性化されて短期記憶に留められるとともに、それまでに意識の前面に活性化されていた情報が不活性なものへと変化して、長期記憶に貯蔵されるのである。また、ある情報が活性化されたときは、それと同じカテゴリーに属する別の情報も呼び起こされ、半活性的な状態で意識されるようになる。このような半活性的な情報は、不活性な情報よりも少ない負担で聞き手に喚起させることができるのである。

チェイフは旧情報という概念を、「発話の時点で聞き手の意識に上っていると話し手によって考えられる知識」と規定する。それに対して新情報とは、「自分の発話によって聞き手の意識の中に新しく導入していると話し手が考えるもの」のことである(Chafe 1976:30)。そしてそれらの中間段階に半活性的な意識状態にある情報が位置づけられるのである(Chafe 1987)。

プリンスは、話し手の想定する聞き手の意識内の状態を「想定される親近性(assumed familiarity)」と名付け、言語形式に影響を及ぼす様々な段階の親近性を分類した(Prince 1981)。その分類によると、文脈や場面によってすでに談話モデルの中に喚起された情報(evoked)と、聞き手が知らないか、知ってはいるが新たに談話モデル内に導入しなければならない新しい情報(new)が両極にあり、それらの間に文脈や場面から推論可能な情報(inferable)が位置づけられるのである。このような親近性の異なりは、英語の場合は例えば定冠詞・不定冠詞の使い分けとして現れてくる。

(2) I got on <u>a bus</u> yesterday and <u>the driver</u> was drunk.

この例の「バス」は談話内に初めて導入される新しい情報で、聞き手はその指

示対象を同定できないために不定冠詞が用いられている。しかし続いて現れる「運転手」のほうは、バスという乗り物が談話内に導入されたことによって推論可能となっているために、定冠詞が用いられるのである。

チェイフやプリンスによって提起された人間の意識状態と言語形式との関係は、上の例のように名詞の定・不定を表す形式や、名詞・代名詞・ゼロ照応詞などの選択を決める重要な要因となるが、語順の問題にも深い関わりを持っている。なぜなら、コミュニケーションが最も円滑に進むのは、新たに展開される情報をすでに述べられた情報と関連づけるための聞き手の負担が最も少ない形式で発話された場合であると考えられるが、そのためには認知的に喚起しやすいものから喚起しにくいものへと続く「旧情報から新情報へ」という流れが最も自然な流れだろうと考えられるからである。

それならば、「旧情報から新情報へ」という流れが普遍的な語順の原理と認められるのか、というと、必ずしもそうではない。むしろ、それとは反対に「新情報から旧情報へ」というのが普遍的な語順であるとする説さえあるのである（Givón 1983, 1988, 1995 など)。そこで、次の節においては機能主義的な語順の普遍性という問題を基本語順の類型論との関わりにおいて論じることにしたい。

2　語順の類型と語順の原理

2．1　語順の原理の普遍性

ギボンは人間の認知の制約に深くかかわる言語の原理の一つに、語用論的な順番の原理(pragmatic principle of linear order)を挙げている(Givón 1995:55ff.)。

(3) 語用論的な順番の原理(pragmatic principle of linear order)

a. より重要な、あるいはより緊急な情報は語列の初めの位置におかれる傾向がある。

b. 喚起しにくい、あるいは予測しにくい情報は語列の初めの位置におかれる傾向がある。

(3) の原理は、語順が自由な言語に見られる傾向性だということであるが、語順が厳しく制約されている英語の場合にも観察されるとして次のような例を挙げている。

(4) a. John milked the goat. （中立）

b. He milks the cow, but the goat he wouldn't milk. （対比的トピック）

c. It's the goat that John milked. （分裂文の焦点）

d. The goat, John milked it. （左方転移）

e. What did John milk? （疑問詞疑問文）

(4e) は疑問詞疑問文であるが、英語の場合、疑問の焦点を表す疑問詞は冒頭に来る。また、(4b)〜(4d)の下線部は文（あるいは節）の冒頭に置かれているが、これらは文脈や場面から予測しにくく、聞き手にとって喚起しにくい情報である。このように、聞き手の意識の中に呼び起こしにくい予測不可能な情報はコミュニケーションの上で緊急に伝達する必要のある重要な情報である場合が多い。そのため、ギボンは(3b) の原理を(3 a) の下位の原理として位置づけることも可能であると述べている。(3a) の原理は、「緊急の課題の原理(principle of communicative task urgency (Givón 1988:275))」、「重要な情報の原理 (first things first principle (Gundel 1988:229))」などと呼ばれているが、これはテーマ・レーマ に対してレーマ・テーマの順、あるいは旧情報・新情報に対して新情報・旧情報の順が自然だとする原理であると言ってよい。

ギボンはこの原理を、人間の言語に普遍的な原理として提示しているようであるが、必ずしもすべての言語に一様に存在する原理なのではない。上に挙げた英語の例の場合も、通常の語順とは異なった有標の語順の例ばかりであり、この語順が英語の無標の語順の場合にも該当するものとは思えない。ミヒルはその点を批判して、「文頭という位置と対比的・有標的なトピックとの関係に相関関係があることは普遍的に認められるが、それ以外の場合についても普遍的な語順を提唱するのは不可能なことのように思われる」と述べている(Myhill 1992:209)。

2．2　類型による語順の原理

ミヒルの場合は、ギボンのようにすべての言語にあてはまる強力な原理を立てようとするのではなく、言語の基本的な語順によって語用論的な語順の傾向が異なっていることを実証しようとする(Myhill 1992: 164ff.)。ミヒルはまず動詞と目的語の語順に着目して言語を類型化し、各タイプと文の特定位置における要素の活性化の度合いとの関わりを調べて、次のような傾向性があると論じている(同上: 209)。

(5) a. 目的語と動詞の語順が自由な言語の場合(Ute、Papagoなど)、談話内での卓立性が高い名詞句（活性化の度合いが低く特定性の度合いが高い名詞句）は動詞の前、卓立性が低い名詞句は動詞の後に来る傾向がある。

b. 固いＶＯ語順で主としてＶＳの語順になる言語(聖書ヘブライ語、Tzotzilなど)も、上とほぼ同様の傾向を示す。

c. 固いＳＶＯ語順の言語の場合（英語、フランス語、中国語など）、対比や有標のトピックは文頭に来る。ＶＳの語順はまれにしか起こらず、その場合のＳは不定名詞句が多い。

d. 固いＶＯ語順で、ＳＶ語順をとることが多い言語（ルーマニア語、スペイン語など）も上記cとほぼ同じ傾向を示す。

e. 固いＳＯＶ言語の場合（日本語など）、対比や有標のトピックは文頭に来る。焦点名詞句は動詞の直前に来る。

ギボンが述べている「喚起しにくく予測可能性の低い情報は文の初めに来る」という傾向性は、上記のグループの(5a)と(5b)にしか該当せず、それ以外の場合は英語の例に見たような有標の語順の場合にしか当てはまらないのである。ギボンが提起した語用論的な順番の原理が強すぎる原理であることについて、ミヒルは、ギボンの調査がアメリカインディアンの言語や聖書ヘブライ語といった特定の言語に偏っていたためではないかと批判している。

ミヒルと同様に類型論的な分類と機能的な語順の原理との関係を論じたものにヘリングが挙げられる(Herring 1990)。ヘリングは主語と動詞との位置関係に着目し、ＳＶ言語とＶＳ言語ではトピックとフォーカスの順番が異なっていると述べ、ＳＶ言語はトピック・フォーカスの順、ＶＳ言語はフォーカス・トピックの順に配列される傾向性が高いと主張する。ヘリングの分類は目的語と動詞の位置関係を基準にしたもので、主語と動詞の位置関係を基準にしたミヒルのものとは異なっている。しかし、ミヒルの分類における(5a)と(5b)はどちらもＶＳという語順をとりやすい言語であり、ヘリングがＶＳ言語に分類したグループと重なっている可能性がある。また、(5c)～(5e)のグループはＳＶ語順をとりやすい言語であるから、ヘリングのＳＶ語順のグループと重なりうる。すなわち、ヘリングの分析も、ミヒルの主張とおおよそのところで一致しているのである。

以上のように、基本語順の類型と語用論的な語順の原理とは、かなりの程度

の相関を示すことが明らかにされている。本稿ではその相関の正しさを確かめたり、相関が生じる原因を考察したりするつもりはないが、以上に述べられたことは、文法的な語順の規則と語用論的な語順の原理との関わりを究明する重要な手掛りを与えてくれる興味深い現象であり、今後さらに多くの言語の記述を進める中で妥当性を検討しなければならない問題であると考える。そのためにも、類型論的な比較が可能となる操作的な分析手法と、その基礎となる語用論的な要因の探求が急がれなければならない。以下はそのような試みの一端を紹介しながら、語順の原理にかかわる問題を整理することにしたい。

3　談話の構造と語順の原理

3．1　トピック性と主題連鎖

文の構成要素の配列は、先行文脈や発話場面の状況によって影響を受けるだけでなく、後続の談話の構成によっても影響を受けている。例えば次の(6)の文が与えられているときに、それに続いて(7a)か(7b)の文が発せられたとする。

(6) 脳死患者からの初の臓器移植手術は、今朝9時半までにすべて終了した。

(7) a. 心臓移植は阪大病院の第一外科で行われた。

b.心臓移植を行ったのは阪大病院の第一外科である。

(7a)と(7b)のどちらの文も、「阪大病院の第一外科が心臓移植を行ったこと」を表しているという点では変わりがない。しかし、どちらが選ばれるかによって、後続談話の展開に、ある傾きが生じる可能性がある。(7a)の場合、次に続くのは肝臓移植や腎臓移植についての事柄となる可能性が、その他の可能性より高いように思われる。一方(7b)の場合は、阪大病院の第一外科が話題として選ばれる可能性のほうが、肝臓移植や腎臓移植が選ばれる可能性より高いのではないだろうか。以上の判定は極めて主観的なものであるが、ギボンは先行文脈だけでなく後続文脈への持続という問題も含めて、より客観的に文の中のある要素が情報伝達に寄与する力を判定する方法を提案した(Givón 1983, 1988など)。そこで、以下、簡単にギボンの説をまとめることにしたい。

ギボンは、文中のある要素の情報の質が、新情報・旧情報を両極とする不連続な状態として理解されていることを批判し、新情報・旧情報は連続的につながるもので、相互に重なり合うものとして理解すべきであるとして、「トピッ

ク性(topicality)」という概念を提唱した(Givón 1983)。そして、文の中でのある要素のトピック性は、その要素と同一の指示対象の分布状態を前後の文脈の中で調べることによって、客観的・操作的に判定できるとする。そのときに用いられるのは、直前の文脈での同一指示対象までの距離(referential distance: RD)と、他の干渉者の有無(potential interference: PI)、および、後続の談話で同一指示対象の生起する頻度(topic percistence: TP)という三つの基準である。これらのうちのRD とPI は先行文脈からの予測の可能性を測定するもので、記憶からの衰退や指示対象の検索といった認知活動と関連が深い。一方のTP は後続談話におけるトピックの重要性を測定するもので、注目という認知活動に関連するものである(Givón 1989)。以上の三つの基準の他に、談話全体という大きな単位のトピック性を測る「トピック比(topic quotient)」という基準も、後にトンプソンによって提唱されているが(Thompson 1990)、これらの研究が目指しているのは、談話の中での主題連鎖の状態が言語形式の選択に重要な関わりを持っているということを、類型論的に検証し、普遍的な語順の原理を探求することである。

さて、語順に関連して緊急の課題の原理が提唱されたことについては２．１節ですでに述べたが、この原理とトピック性との関わりは、次のようなマトリックスによって表されている(Givón 1988: 20)。

(8)　コメント ＞ コメント-トピック ＞ トピック-コメント ＞ トピック
　　(ゼロトピック)　　(ゼロコメント)

最も左はトピックが省略され、明示的に表現されない場合である。このようなトピックは予測可能性が高く、言語記号を用いなくても十分に復元可能で、そのためトピック性は極めて高いと見なされる。一方、最も右端はトピックだけが繰り返されている場合である。わざわざトピックを繰り返すというのは、その指示対象の予測可能性が下がったために再び言及する必要が生じたのであるから、この場合のトピック性は相対的に低いと言える。つまり(8) においては、左から右に行くに従ってトピックの持つトピック性が低くなる。トピック性がきわめて高ければトピックは省略されるが、それよりも低ければ文末に、さらに低くなれば文頭に位置するということになる。つまり、右側の二つの型でトピックが文頭にあるのは、トピック性が下がったためにそれを伝達することが緊急の課題となったことによるものであると説明される。すなわち(8) に示した語順は「最も緊急な課題をまず処理する」という緊急の課題の原理に従っているのである。また、左端のゼロトピックに関しては、予測しにくい情報にはより大

きなサイズ（反対に予測しやすい情報にはより小さなサイズ）の言語記号が割り当てられるという記号量の原理とも一致していると論じている。

(8) のマトリックスが言語に普遍的なものであるかどうかは、ミヒルが述べているように問題がある。確かに、「トピック－コメント」型のトピック性がゼロトピックより低いということについては(8) の示すとおりである。しかし、「トピック－コメント」型の文の内部ではトピックの方がコメントよりも相対的に高いトピック性を有しているはずである。さらに英語のようにトピックの省略がしにくい言語では、トピック性のきわめて高いトピックが文頭に立つということも、ごく普通の現象として観察されるであろう。

しかしながら、以上のような問題があるからといって、人間の認知活動を写す普遍的な原理との関連で語順の原理を説明しようとするギボンの試みそのものが間違っているとは言えないだろう。文法的な語順の規則や、さまざまな語用論的な要因といういくつもの複雑な要因がかかわる中で決まってくる語順の原理が、ギボンの提唱する計量的な方法で直接的に明らかにされると考えるのも早計だが、人間の認知活動と言語形式との関わりを明らかにするための重要な手掛りがギボンによって与えられたことは確かである。さらに、後続談話も含めた大きな単位の談話の中での主題連鎖の状態が、語順の選択に重要な影響を及ぼしていることを明らかにしたという点についても、大きな意義があると言うことができる。

３．２　提示文と談話主題

ある指示対象が後続の談話の主題として導入されるときに特定の構造を用いることは、多くの言語に観察されている(Givón 1983:25)。例えば次の文が発せられたとき、それ以降の談話では電車について語られるのが普通だろう。

(9) a. Round the bend came the train.
　　b. What came round the bend was the train.

上の文では、動作主である'the train' を文末に移動させることによって、その要素を聞き手に強く印象づける効果が生じている。そして、それによって後続の談話でその要素の処理にかかる負担が軽減されているのである。談話の中の要素を特に目立たせて提示する上のような文は、提示文(presentative sentence) と呼ばれている。ヘツロンは、提示文の持つ提示機能を、「後続の談話や後の状

況において想起させるために、文の中の一つの要素に対して特別の注意を喚起する機能」と規定しているが(Hetzron 1975:374)、提示文とは、そのような提示機能を効果的に果たす構造を持った文のことである。

ギボンによれば、提示文の語順は、ＶＳ言語ではＳＶ、ＳＶ言語ではＶＳの順になるという。つまり、通常の語順とは異なった位置に目立たせたい要素を移動させるということである。聞き手が期待しているのとは異なった順番で情報を提示することにより聞き手の注目を引きつける効果が生じるわけである。しかも提示文の場合は、記憶保持のうえで重要な役割を占める文頭ないしは文末という特別な位置に移動させることによって、その要素をいっそう強く聞き手に印象づけ、聞き手の短期記憶の中に長く留めさせることができるのである。提示文は、このように、ある要素を目立つ位置に移動させることによって提示機能を果たしているのであるが、この種の移動はヘツロンによって「提示移動(presentative movement)」と呼ばれている。

ところで英語や日本語のようなＳＶ言語の場合、提示文はＶＳの語順になるわけであるが、これは、単に通常の語順と違うというだけでなく、後続の談話で語り継ぎたい要素を、その談話に最も近い位置に移動させたものであると言うこともできる。すなわち、ここには、「後ろに続く要素は文末に提示する」という語順の原理が働いているのである。この原理をここでは仮に「後続の主題の原理」と呼んでおくことにしよう。この原理は、より高次の原理として「関連する情報はなるべく近接して述べる」という関連性の語順の原理に属するものである(砂川1994)。プラーグ学派の提唱する「旧情報から新情報へ」という語順の原理の場合も、先行文脈や場面から喚起できる情報を先行文脈に近い文頭に配置するための原理であることから、やはりこれも関連性の語順の原理の下位に位置づけることができる。すなわち関連性の語順の原理は、後続の主題の原理と旧情報から新情報への原理という二つの原理からなるものである。

３．３　競合する語順の原理

これまでに述べてきたことから、語順の原理としては、少なくとも次の三つを考えることができる。

(10) 1. 旧情報から新情報への原理　･･･旧情報を文頭へ ┐
　　 2. 後続の主題の原理･････････後続主題を文末へ ┘ 関連性の語順の原理

3. 緊急の課題の原理‥‥‥‥‥重要な情報を文頭へ

このことからも分かるように、語順の原理は、文頭と文末をどのような要素が占めるかという問題と深くかかわっている。心理言語学的な実験でも、記憶からの想起や言語処理の時間に関して、文頭と文末の要素が他の部分の要素に比べてきわめて顕著な特徴を示すことが報告されている。例えばヤールベラにおける記憶実験では、文末の要素が最も正確に記憶され、文頭の要素はそれに次ぐものであることが明らかにされている(Jarvella 1979)。

文頭と文末の位置をめぐる(10)に示された原理は、互いに矛盾なく両立することもあるが、競合することも少なくない。例えば次の(11a)と(11b)の下線部の語順が異なっているのは、緊急の課題の原理に従うか、旧情報から新情報への原理に従うかの違いによってもたらされたものである。

(11) a. 一階の応接間から火の手が上がり、母屋を全焼した。たばこの不始末が原因だった。

b. 一階の応接間から火の手が上がり、母屋を全焼した。原因はたばこの不始末だった。

火事で母屋が全焼したという情報が与えられれば、「その火事の原因は何か」という問いが意識に上るのは、きわめて自然なことである。それに対する答えである「たばこの不始末」は、この談話では重要な情報であり、それを伝えることは緊急の課題である。(11a)は緊急の課題の原理に従って、聞き手の意識内で活性化させたい「たばこの不始末」が文頭に述べられている。それに対し、(11b)のほうは、旧情報から新情報への原理に従って、すでに聞き手の中で活性化されていると思われる「原因」が文頭に述べられているのである。

このように、緊急の課題の原理と旧情報から新情報への原理は競合するのが普通であるが、対比的な要素が文頭に用いられた次の(12a)のような場合は、両者の競合が弱められる(Gundel 1988)。

(12) a. 今の若い人は、旅に行ってモノに出会おうとするけど、ぼくはヒトに出会うのが旅だと思っている。

b. 今の若い人は、旅に行ってモノに出合おうとするけど、ぼくは旅というのはヒトに出会うことだと思っている。

(12a)の「ヒトに出会う」はその前にある「モノに出会う」と対比的な内容を表

しており、先行文脈と強い関連性を持つ。その意味で旧情報が先に述べられていると言えるのであるが、同時に先行文脈から喚起された「旅に行って何に出会おうとするのか」という問いに答える重要な情報であり、それを文頭に述べることは緊急の課題の原理にも従っていると言えるのである。

以上見てきたように、コミュニケーションを行う際には人間の認知の営みに制約を受けたさまざまな動機づけが競合しうる。文の構造は、その動機に基いた数多くの要請に答えなければならないのであるが、それらの要請を同時に果たすことのできない場合も少なくない。そのようなとき、何が優先されて何が退けられるのか、またそれを決定する要因は何なのかといった問題、あるいはまた、文体や個人的な好みといった修辞的なレベルでの動機づけを本稿で述べたような認知的なレベルの動機づけと区別しうるのか、区別しうるとしたらどのような基準が考えられるのかといった問題など、今の段階では答えられない数多くの問題が残されている。

4　むすび

以上、機能主義的な語順研究において問題となる重要な概念を整理しながら、先行研究を概観してきた。生物としての人間の身体的な制約や認知的な営みに適合したさまざまな動機づけにかかわる語順の問題は、個別言語の相違を越えて人間の言語に共通する普遍的な原理の存在を予感させる。しかし、ダウニングが述べるように(Downing 1995)、認知的に十分に動機づけられているはずなのに個別言語によっては該当しない原理があるのはなぜなのか、また、時代によって語順が変化するのはなぜなのか、類型論的にすべての言語を比較しうる基準があり得るのか、などの簡単に解決しそうにない問題を抱えている限り、安易な一般化は慎まなければならないだろう。残された道は個別言語の実証的な記述を地道に積み上げていく中で、類型論的な比較の方法を模索して行くことである。その意味でも、ダウニングとヌーナン(Downing and Noonan1995) のような類型論を視野におさめた個別言語の記述の試みは高く評価することができる。

引用文献

Chafe, W. L. 1976. Giveness, Consrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of View. In C. Li (Ed.), *Subject and Topic.* New York, Academic Press. 27-55.

Chafe, W. L. 1987. Cognitive Constraints on Information Flow. In R. Tomlin (Ed.), *Coherence and Grounding in Discourse.* Amsterdam, John Benjamins. 21-51.

Chomsky, N. 1971. Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation. In D. Steinberg and L. Jakobovits (Eds.), *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics, and Psychology.* Cambridge, Cambridge University Press. 183-216.

Danes, F. 1974. Functional Sentence Perspective and the Organization of the Text. In F. Danes (Ed.), *Papers on Functional Sentence Perspective.* The Hague/Paris, Mouton. 106-128.

Downing, P. 1995. Word Order in Discourse: By Way of Introduction. In P. Downing and M. Noonan (Eds.). Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 1-27.

Downing, P. and M. Noonan. 1995. *Word Order in Discourse.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.

Firbas, J. 1964. On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis. TLP 1. 267-280.

Givón, T. 1983. Topic Continuity in Discourse: An Introduction. In T. Givón (Ed.), *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study.* Amsterdam, John Benjamins. 3-41.

Givón, T. 1987. Beyond Foreground and Background. In R. S. Tomlin (Eds.), *Coherence and Grounding in Discourse.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 175-188.

Givón, T. 1988. The Pragmatics of Word-order: Predictability, Importance and Attention. In In M. Hammond, E. Moraucsik, and J. Wirth (Eds.), *Studies in Syntactic Typology.* Amsterdam, John Benjamins. 243-284.

Givón, T. 1989. *Mind, Code, and Context: Essays in Pragmatics.* Hillsdale, Erlbaum Associates.

Givón, T. 1995. Isomorphism in the Grammatical Code. In R. Simone (Eds.), *Iconicity in Language.* Amsterdam/ Philadelphia, John Benjamins. 48-76.

Greenberg, J. H. 1966. Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements. In J. H. Greenberg (Ed.), *Universals of*

Language. Cambridge, Mass., MIT Press. second edition. 73-113.

Gundel, J. K. 1988. Universals of Topic-Comment Structure. In M. Hammond, E. Moraucsik, and J. Wirth (Eds.), *Studies in Syntactic Typology.* Amsterdam, John Benjamins. 209-239.

Herring, S. 1990. Information Structure as a Consequence of Word Order Type. *The Sixteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, 163-174.*

Hetzron, R. 1975. The Presentative Movement or Why the Ideal Word Order Is V.S.O.P. In C. Li (Ed.), *Word Order and Word Order Change.* 347-388, University of Texas Press. 347-388.

Jarvella, R. J. 1979. Immediate Memory and Discourse Processing. In G. H. Bower (Ed.^Eds.), *The Psychology of Learning and Motivation*. 379-421.

Lambrecht, K. 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of discourse Referents.* Cambridge, Cambridge University Press.

Myhill, J. 1992. *Typological Discourse Analysis.* Oxford, Blackwell.

西山佑司 (1979)「新情報・旧情報という概念について」 昭和54年度科学研究費補助金研究報告『日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』 127-151.

Prince, E. F. 1981. Toward a Taxonomy of Given-New Information. In P. I. Cole (Ed.), *Radical Pragmatics.* London, Academic Press. 223-255.

Prince, E. F. 1986. On the Syntactic Marking of Presupposed Open Propositions. *Chicago Linguistic Society* 22. Papers from the Parasession on Pragmatics and Grammatical Theory. : 233-259.

砂川有里子 (1994)「Word Order Principles in Japanese Cleft Constructions: 'A no wa B da' and 'A no ga B da'」 平成５年度科学研究費補助金一般研究（A）研究成果報告書『個別言語学における文法カテゴリーの一般化に関する理論的研究』 70-79.

Thompson, C. L. 1990. On the Treatment of Topical Objects in Chepang: Passive or Inverse?. *Studies in Language.* 14(2): 405-427.

Word Order of Japanese Copular Sentences

Yuriko Sunakawa
Institute of Literature and Linguistics
University of Tsukuba
sunakawa@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

1. Introduction

A basic assumption of discourse analysis is that linguistic structure reflects the function that it performs (Chafe 1987, Cowan 1995, Givón 1995). In fact, when we observe the utterances we use in our daily communication, we find that many linguistic phenomena can not be explained in terms of linguistic arbitrariness. For example, there are cases where different syntactic structures share the same cognitive meaning. In order to explain this phenomenon, we need to assume that these syntactic constructions are motivated to make our communication more efficient. Underlying this explanation is the assumption that language is the product of human beings and is very likely to be constrained by our cognitive competence. According to Cowan (1995:30), 'processing proceeds smoothly when sentences are structured in such a way that they maximize the "ease of recall" and minimize the "degree of effort" involved in relating in-coming information to the already comprehended text'. Thus, discourse analysts assume that structures are likely to be designed to be used in the most effective way to satisfy our motivations.

Our communication motivations, however, are not necessarily harmonious and sometimes conflict with each other. For example, when we convey some information to a hearer, it may appear natural to convey more urgent information before less urgent information. Similarly, we would expect that the hearer would also want to hear this newsworthy information without any boring preliminaries. This suggests that there is a communication motivation to state the most urgent information first. However, if we convey the most urgent information without any preliminaries, it is very likely that the hearer will have difficulty understanding

what we are trying to get across. This suggests that there is another communication motivation to state shared information first, and then proceed to give new information. Thus, the communication motivation, 'Urgent Information First' and 'Shared Information First' compete with one another and the speaker must chose to give priority to one and sacrifice the other .

In this paper, I examine different types of copular sentences in written Japanese discourse in data collected from Japanese written texts, including essays, advertisement copies and short squibs in magazines. I discuss the functions and choice for copular sentences with different word orders in term of the competing motivations such as discussed above.

2. Copular Sentences

Copular sentences have been classified into two types: specificational and predicational (Kanbayashi 1984, Nishiyama 1985, Declerck 1988). Specificational copular sentences specify a value for a variable, as exemplified in (1).

(1) *Hannin wa Taroo da.*
The criminal is Taro.

The speaker of this sentence is specifying who the criminal is. In doing so, she or he presupposes that there is a person X who is the criminal and asserts that this X is TARO. In other words, this sentence specifies the value TARO for the variable X who is the criminal.

In contrast, instead of specifying a value for a variable, predicational sentences are used to predicate the properties of the referent of the subject noun phrase as in (2a) and (2b).

(2)a.*Taroo wa itazurakko da.*
Taro is a naughty boy.

b.*Taroo wa gakusee da.*
Taro is a student.

(2a) predicates a characteristic, and (2b) the status of *TAROO*. Because the referent of the subject noun *TAROO* has been specified to these sentences, these sentences are used not for the specification but for the predication of the subject

noun phrase *TAROO*.

Another major difference between specificational and predicational sentences is that the order of the subject noun phrase and the predicate noun phrase can be reversed in specificational sentence, but not in a predicational sentence, as shown in (3) and (4), respectively.

(3)a.*Hannin wa Taroo da.*
Taro is the criminal. (As for the criminal, it is Taro.)

b.*Taroo ga hannin da.*
Taro is the criminal. (It is Taro who is the criminal.)

(4)a.*Taroo wa gakusee da.*
Taro is a student. (As for Taro, he is a student.)

b.**Gakusee ga Taroo da.*
*A student is Taro. (It is a student who is Taro.)

The order of the subject noun phrase and the predicate noun phrase in (3a) can be reversed to become *TAROO GA HANNIN DA*. '(It is) Taro (who) is the criminal' as is shown in (3b).[1] However, the sentence that results from reversing the order in (4a) is the awkward sentence in (4b) **GAKUSEE GA TAROO DA* . '(It is) a student (who) is Taro'.

The fact that the two sentences in (3a) and (3b) can be an answer to the same question *HANNIN WA DARE?* or *DARE GA HANNIN?* 'Who is the criminal?' indicates that both sentences have the same presupposition 'there is a person X who is the criminal' and make the same assertion 'The person X is TARO'. Consequently we consider the information structure of these two constructions to be the same. The noun phrase *TAROO*, the information that the speaker wants to convey most to the hearer is the most informative part, i.e., the focus of these sentences.

In summary, there are two types of copular sentences, specificational and predicational, and specificational sentences in Japanese can be further classified into two types: the A wa B da '(As for) A, (it) is B' construction as in (3a), where the focus is given at the end of the sentence, and the reversed B ga A da '(It is) B (who) is A' construction as in (3b), where the focus is given at the beginning of

the sentence. I will refer to the specificational A wa B da construction as a 'Postposed Focus Sentence', and the reversed B ga A da construction as a 'Preposed Focus Sentence'. The information flow of a Postposed Focus Sentence A wa B da concurs with the communication motivation 'Shared Information First', because the speaker begins with information that she or he considers to be presupposed to the hearer, and then adds what is presumably unpresupposed information. In the Preposed Focus Sentence B ga A da, on the other hand, the information flow concurs with the communication motivation 'Urgent Information First', because the focus B is highlighted by being placed at the beginning of a sentence, i.e., the most salient position in the sentence.

3. Presentational Copular Sentences

In the previous section, I described the differences between specificational and predicational copular sentences and examined the information structure of the two types of specificational sentences: Postposed Focus and Preposed Focus Sentences. In this section, I examine another type of specificational copular sentences which has the same syntactic structure as the Preposed Focus Sentence B ga A da, but the order of the subject noun phrase and the predicate noun phrase can not be changed to the corresponding A wa B da counterpart.

(5)a.*Kono ketsuron o hikidasu no ni Kepuraa wa ichi-nenkan kakarimashita. Kooshite kono dai-ni no kasetsu mo mukachi na mono to shite kemuri no yoo ni kiesarimashita. Shikashi Kepuraa wa ki o torinaoshi, moo ichi-do denaoshimasu. Soshite dai-san no kasetsu ga daen deshita.*

It took one year for Kepler to come to this conclusion. Thus, this second hypothesis disappeared like smoke as worthless thing. However, Kepler pulled himself together and started all over again. And the third hypothesis was an ellipse.

b.**Soshite daen wa dai-san no kasetsu deshita.*

*And as for an ellipse it was the third hypothesis.

(6)a.*Mori no doobutsu-tachi ga tsugitsugi ni sugata o arawashimashita. Soshite saigo ni dete kita no ga nan to ookina kuma datta no desu.*

Animals in the woods appeared one after another. And surprisingly, it's that the one which appeared last was a big bear.

b.**Soshite nan to kuma wa saigo ni dete kita no desu.*

*And surprisingly, it's that as for a big bear, it was the one which appeared last.

Amano (1995) noted that copular sentences like those in (5) and (6) have a focus on the postposed position, and she named these sentences 'Postposed Focus Sentences'. According to her analysis, the underlined sentence in (6a) should have the presupposition 'there is an X which appeared last,' and the assertion 'X is a big bear'. If this is the case, there would be no distinction between the information structures of the underlined sentence in (6a) and the same sentence with the particle *WA* instead of the particle *GA* as shown in (7).

(7) *Soshite saigo ni dete kita no WA nanto ookina kuma datta no desu.*

There are two problems with Amano's explanation: (1)How can sentences such as (6a) A ga B da and (7) A wa B da with different particles have the same information structure and same word order? (2) If A ga B da and A wa B da sentences have the same information structure, why can they be interchangeable in the some contexts as in (6), but not in others such as in (8) below?

(8)a.*Naze Amerika ni 'Gan Sentaa' o to omowareru kata no tame ni, watashi to Amerika to gan to no kankee o hanasasete itadakitai. Watashi to Amerika o musubitsuketa no wa chichi de aru.*

For the people who wonders why (I established) a 'Cancer Center' in America, I would like to be allowed to talk about the connection between me, America, and cancer. The one who connected me and America was my father.

b.**Watashi to America o musubitsuketa no ga chichi de aru.*

*(It was) the one who connected me and America (who) was my father.

As a solution of these problems I should suggest that there are two distinct functions for the postposed elements in sentences such as (6a) A ga B da and (7) A wa B da. I name these two functions the Presentative Function and the Focal

Function, respectively.

In a Postposed Focus Sentences the postposed element has the Focal Function because the referent is in the focal position and fills an information gap between the speaker and the hearer. In (7), the focus referent *OOKINA KUMA* 'a big bear' can be stressed as in (7'a), but the presupposed referent *SAIGO NI DETE KITA NO* 'the one that appeared last' can not be stressed as shown in (7'b).

(7')a.*Soshite saigo ni dete kita no wa OOKINA KUMA datta no desu.*

b.*Soshite SAIGO NI DETE KITA NO wa ookina kuma datta no desu.

In contrast, we can put stress on the preposed element in (6a) *SAIGO NI DETE KITA NO* as in (6'a) but the postposed element *OOKINA KUMA* can not be stressed as shown in (6'b).

(6')a.*Soshite SAIGO NI DETE KITA NO ga ookina kuma datta no desu.*

b.*Soshite saigo ni detekita no ga OOKINA KUMA datta no desu.

Based on the above, I conclude that the function of (6a) differs from the Focal Function of (7) and that the copular sentence in (6a) has what Hetzron (1975: 374) refers to as the 'presentative function', i.e., it functions to call 'special attention to one element of the sentence for recall in the subsequent discourse or situation'. Therefore I will refer to the copular sentence type such as that in (6a) as a 'Presentative Sentence'. Sentence in (6a) has the same syntactic structure as the Preposed Focus Sentence B ga A da and has a function somewhat similar to the Postposed Focus Sentence A wa B da. However its primary function is to actualize what Hetzron refers to as 'presentative movement', i.e., it functions to place the element which needs to be recalled later in the discourse in the sentence final or later than usual position. As indicated in Table 1 below, the persistence[2] of a postposed referent is remarkably high in Presentative Sentences A ga B da as compared with Preposed Focus Sentences B ga A da, and relatively high as compared with Postposed Focus Sentences A wa B da. This indicates that the information flow of Presentative Sentences concurs with 'Persistent Information Last' principle.

Table 1: Persistence of the Postposed Referent after being mentioned in a copular sentence

	No. of copular sentences in corpus	No. of copular sentences whose postposed referent persist into the next discourse (%)
Postposed Focus A wa B da	283	203 (71.7%)
Preposed Focus B ga A da	133	34 (25.6%)
Presentative A ga B da	83	70 (84.3%)

I have demonstrated that specificational copular sentences in Japanese can be divided into the three types given in (9).

(9)a. Postposed Focus Sentence: A wa B da --------'Shared Information First'

Saigo ni dete kita no wa ookina kuma datta.

(As for) the one which appeared last (it) was a big bear.

b. Preposed Focus Sentence: B ga A da--------- 'Urgent Information First'

Taroo ga gakusee da.

It is Taro who is a student.

c. Presentative Sentence: A ga B da----------'Persistent Information Last'

Saigo ni detekita no ga ookina kuma datta.

The one which appeared last was a big bear.

The speaker's choice among the three types of copular sentences is strongly influenced by the word order. The principles that dominate the word order are summarized in (10).

(10)a. Shared Information First: State presupposed information before unpresupposed information.

b. Urgent Information First: State urgent information as soon as possible.

c. Persistent Information Last: State persistent information as close as possible to the subsequent discourse where the referent will be mentioned again.

Notes

This paper was presented at the Tenth National Conference of Japanese Studies Association of Australia on 7 July, 1997. I wish to thank Polly Szatrowski for reading and commenting helpfully on an earlier draft of this paper.

1. In reversing the order of the subject noun phrase and predicate noun phrase in (3a) it is necessary to change the particle *WA* in (3a) to *GA* in (3b). The particle *WA* in (3a) indicates the topic of the sentence while the particle *GA* in (3b) indicates the subject of the copular *DA*. This change in particles is necessary in order that the same information is presupposed and asserted in both (3a) and (3b). In both sentences *HANNIN* 'the criminal' is presupposed and *TAROO* is asserted. The topic marker *WA* is used in (3a) to indicate that *HANNIN* 'the criminal' is presupposed, but *WA* cannot be used in (3b) because *TAROO* is asserted rather than presupposed. The use of (3b) with the topic marker *WA* instead of *GA*, *TAROO WA HANNIN DA*. '(As for) Taro, (he) is the criminal' in answer to the question *HANNIN WA DARE?* or *DARE GA HANNIN?* 'Who is the criminal?' would sound quite awkward.

2. A referent is persistent if it continues to be referred to in the discourse after it is mentioned in one of the copular sentence types analyzed in this study.

References

Amano, Midori 1995, 'Kookoo Shooten no "A ga B da" Bun (Postposed Focus "A ga B da" Sentences)', in *Niigata Daigaku Jinbunkagaku Kenkyuu*, 89:1-24.

Chafe, Wallace 1987, 'Cognitive Constraints on Information Flow', in R. Tomlin (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*, 21-51, John Benjamins, Amsterdam.

Cowan, Ron 1995, 'What Are Discourse Principles Made of?', in P. Downing and M. Noonan, (eds.), *Word Order in Discourse*, 29-50, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

Downing, Pamela 1995, 'Word Order in Discourse: By Way of Introduction', in

P. Downing and M. Noonan (eds.), *Word Order in Discourse*, 1-27, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

Declerck, Renaat 1988, *Studies on Copular Sentences, Cleft and Pseudo-clefts*, Foris Publications, Holland/USA.

Givón, Talmy 1983, 'Topic Continuity in Discourse: An Introduction', in T. Givón (ed.), *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*, 3-41, John Benjamins, Amsterdam.

Givón, Talmy 1988, 'The Pragmatics of Word-order: Predictability, Importance and Attention', in M. Hammond et al.(eds.), *Studies in Syntactic Typology*, 243-284, John Benjamins, Amsterdam.

Givón, Talmy 1995, 'Isomorphism in the Grammatical Code', in R. Simone (ed.), *Iconicity in Language*, 48-76, John Benjamins, Amsterdam.

Gundel, Jeanette 1988, 'Universals of topic-comment structure', in M. Hammond et al.(eds.), *Studies in Syntactic Typology*, 209-239, John Benjamins, Amsterdam.

Hetzron, Robert 1971, 'Presentative Function and Presentative Movement', in *Studies in African Linguistics*, Supplement 2:79-105.

Hetzron, Robert 1975, 'The Presentative Movement or Why the Ideal Word Order Is V.S.O.P', in C. Li (ed.), *Word Order and Word Order Change*, 347-388, University of Texas Press, Austin.

Kanbayashi, Yoji 1984, 'Shitei to Sotei: WA to GA no Ichimen (Specificational and Predicational: An Aspect of WA and GA)', The University of Tsukuba, Master Theses.

Myhill, John 1992, *Typological Discourse Analysis*, Blackwell, Oxford.

Nishiyama, Yuji 1985, 'Soteibun, Shiteibun, Dooteibun no Kubetsu o Megutte (The Distinction between Predicational, Specificational, and Identificational Sentences)', in *Keioo Gijuku Daigaku Gengo Bunka Kenkyuujo Kiyoo* 17: 135-165.

Prince, Ellen 1981, 'Toward a Taxonomy of Given-new Information', in P.I. Cole (ed.), *Radical Pragmatics*, 223-255, Academic Press, London.

Sunakawa, Yuriko 1995, 'Nihongo Kopyura-bun no Ruikei to Kinoo: Kijutsu-bun to Dootei-bun (Taxonomy and Functions of Japanese Copular Sentences: Predicational and Identificational)', in I. Ueda et al. (eds.),

Gengo Tankyuu no Ryooiki (Domain of Linguistic Inquiry), 261-273, Daigaku-Shorin, Tokyo.

Sunakawa, Yuriko 1996, 'Nihongo Kopyura-bun no Danwa Kinoo to Gojun no Genri: "A ga B da" to "A no ga B da" Koobun o Megutte (Discourse Functions and Word Order Principles of Japanese Copular Sentences: "A ga B da" and "A no ga B da" constructions)', in *Bungei-Gengo Kenkyuu* 30: 51-71.

機能主義的な語順研究に関する
参考文献一覧

（英語文献：アルファベット順）

Akmajian, A. 1979. *Aspects of the Grammar of Focus in English*. New York, Garland.

Allerton, D. J. 1978. The Notion of 'Givenness' and Its Relation to Presupposition and to Theme. *Lingua*. 44: 133-168.

Barry, R. 1975. Topic in Chinese: An Overlap of meaning, Grammar and discourse Function. In R. E. Grossman, L. K. Sam and T. J. Vance (Eds.), *CLC Papers form the Parasession of Functionalism*. Chicago, Chicago Linguistic Society.

Bates, E. 1976. *Language and Context, the Acquisition of Pragmatics*. New York, Academic Press.

Birner, B. and G. Ward. 1998. *Information Status and Noncanonical Word Order in English*. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.

Birner, B. J. 1994. Information Status and Word Order: An Analysis of English Inversion. *Language*. 70(2): 233-259.

Blakemore, D. 1988. The Organization of Discourse. In F. J. Newmeyer (Ed.), *Linguistics: The Cambridge Survey Vol 4, Language: The Socio-cultural Context*. Cambridge, Cambridge University Press. 229-250.

Bolkestein, A. M. 1985. Cohesiveness and Syntactic Variation: Quantitative vs. Qualitative Grammar. In A. M. Bolkestein, C. de Groot and J. L. Mackenzie (Eds.), *Syntax and Pragmatics in Functional Grammar*. Dordrecht, Foris Publications. 1-14.

Brown, G. and G. Yule. 1983. *Discourse Analysis*. Cambridge, Cambridge University Press.

Chafe, W. L. 1976. Giveness, Consrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and

Point of View. In C. Li (Ed.), *Subject and Topic.* New York, Academic Press. 27-55.

Chafe, W. L. 1985. Linguistic Differences Produced by Differences between Speaking and Writing. In D. R. Olson, N. Torrance and A. Hildyard (Eds.), *Literacy, Language, and Learning. Cambridge*, Cambridge University Press. 105-123.

Chafe, W. L. 1987. Cognitive Constraints on Information Flow. In R. Tomlin (Ed.), *Coherence and Grounding in Discourse.* Amsterdam, John Benjamins. 21-51.

Chafe, W. L. 1992. The Flow of Ideas in a Sample of Written Language. In W. C. Mann and S. A. Thompson (Eds.), *Discourse Description: Diverse Linguistic Analyses of a Fund-raising Text.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 268-294.

Chafe, W. L. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time.* Chicago/London, The University of Chicago Press.

Chafe, W. L. 1997. Polyphonic Topic Development. In T. Givón (Ed.), *Conversation: Cognitive, Communicative and Social Perspectives.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 41-53.

Chomsky, N. 1971. Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation. In D. Steinberg and L. Jakobovits (Eds.), *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics, and Psychology.* Cambridge, Cambridge University Press. 183-216.

Collier-Sanuki, Y. M. 1993. *Word Order and Discourse Grammar: A Contrastive Analysis of Japanese and English Relative Clauses in Written Narratives.* Ph.D. Dissertation, University of California, Los Angeles.

Collins, P. C. 1991. *Cleft and Pseudo-cleft Constructions in English.* London, Routledge.

Comrie, B. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology.* Chicago, The University of Chicago Press.

Cowan, R. 1995. What are Discourse Principles Made of? In P. Downing and M. Noonan (Eds.). Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 29-49.

Daneš, F. 1974. Functional Sentence Perspective and the Organization of the Text. In F. Danes (Ed.), *Papers on Functional Sentence Perspective.* The Hague/Paris,

Mouton. 106-128.

Daneš, F. 1994. Involvement with Language and in Language. *Journal of Pragmatics.* 22: 251-264.

de Beaugrande, R. and W. Dressler. 1981. *Introduction to Text Linguistics.* London/New York, Longman.

Declerck, R. 1983. 'It is Mr. Y' or 'He is Mr. Y'? . *Lingua.* 59: 209-246.

Declerck, R. 1984. The Pragmatics of IT-clefts and WH-clefts. *Lingua.* 64: 251-289.

Declerck, R. 1988. *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-clefts.* Holland/USA, Leuven University Press, Foris Publications.

Declerck, R. 1990. A Taxonomy of Copular Sentences: A Reply to Keizer. *Linguistics.* 29: 521-536.

Declerck, R. 1992. The Inferential IT IS THAT-construction and Its Congeners. *Lingua.* 87: 203-230.

Declerck, R. 1994. The Taxonomy and Interpretation of Clefts and Pseudo-clefts. *Lingua.* 93: 183-220.

Delin, J. 1989. Cleft Constructions in Discourse. University of Edinburgh, UK.

Dik, S. 1989. *The Theory of Functional Grammar: Part I.* Dordrecht/Providence RI, Foris Publications.

Donnellan, K. S. 1966. Reference and Definite Descriptions. The Philosophical Review. 75: 281-304.

Downing, P. 1995. Word Order in Discourse: By Way of Introduction. In P. Downing and M. Noonan (Eds.). Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 1-27.

Downing, P. and M. Noonan. 1995. *Word Order in Discourse.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.

Dressler, W. U. 1994 Functional Sentence Perspective within a Model of Natural Textlinguistic. In S. Čmejrková and F. Šticha (Eds.), The Syntax of Sentence and Text. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 91-104.

Dryer, M. S. 1995. Frequency and Pragmatically Unmarked Word Order. In P. Downing and M. Noonan (Eds.). Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 105-135.

Duszak, A. 1994 On Thematic Configurations in Texts: Orientation and goals. In S. Čmejrková and F. Šticha (Eds.), The Syntax of Sentence and Text. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 105-117.

Firbas, J. 1964. On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis. TLP 1. 267-280.

Fageber, S. 1983. Discourse Strategies in Pulaar: The Uses of Focus. *Studies in African Linguistics.* 14(2): 141-157.

Fox, B. A. 1987. *Discourse Structure and Anaphora.* Cambridge, Cambridge University Press.

Fuller, J. W. and J. K. Gundel. 1987. Topic-prominence in Interlanguage. *Language Learning.* 37(1): 1-18.

Garcia, E. C. 1991. Grasping the Nettle: Variation as Proof of Invariance. In L. R. W. et.al. (Eds.), *New Vistas in Grammar: Invariance and Variation.* Amsterdam, John Benjamins. 33-59.

Geluykens, R. 1992. *From Discourse Process to Grammatical Construction on Left-dislocation in English.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.

Givón. 1979. *On Understanding Grammar.* New York, Academic Press.

Givón, T. 1982. Logic vs. Pragmatics, with Human Language as the Referee: Toward an Empirically Viable Epistemology. *Journal of Pragmatics.* 6: 81-133 .

Givón, T. 1983. Topic Continuity in Discourse: An Introduction. In T. Givón (Ed.), *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study.* Amsterdam, John Benjamins. 3-41.

Givón, T. (Ed.). 1985. Quantified Studies in Discourse. *special volume of Text.*

Givón, T. 1987. Beyond Foreground and Background. In R. S. Tomlin (Eds.), *Coherence and Grounding in Discourse.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 175-188.

Givón, T. 1988. The Pragmatics of Word-order: Predictability, Importance and Attention. In In M. Hammond, E. Moraucsik, and J. Wirth (Eds.), *Studies in Syntactic Typology.* Amsterdam, John Benjamins. 243-284.

Givón, T. 1989. *Mind, Code, and Context: Essays in Pragmatics.* Hillsdale, Erlbaum Associates.

Givón, T. 1995. Isomorphism in the Grammatical Code. In R. Simone (Eds.), *Iconicity in Language.* Amsterdam/ Philadelphia, John Benjamins. 48-76.

Goutsos, D. 1997. Modeling Discourse Topic: Sequential Relations and Strategies in Expository Text. Norwood, New Jersey, Ablex Publishing Corporation.

Greenberg, J. H. 1966. Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements. In J. H. Greenberg (Ed.), *Universals of Language.* Cambridge, Mass., MIT Press. second edition. 73-113.

Grice, P. 1975. Logic and Conversation. In P. Cole, J. Kinball and J. Morgan (Eds.), *Syntax and Semantics vol.3.* New York, Academic Press.

Gundel, J. K. 1977. Where Do Cleft Sentences Come From?. *Language.* 53(3): 543-559.

Gundel, J. K. 1985. 'Shared Knowledge' and Topicality. *Journal of Pragmatics.* 9: 83-107.

Gundel, J. K. 1988. Universals of Topic-Comment Structure. In M. Hammond, E. Moraucsik, and J. Wirth (Eds.), *Studies in Syntactic Typology.* Amsterdam, John Benjamins. 209-239.

Hannay, M. 1985. Inferrability, Discourse-boundness, and Sub-topics. In A. M. Bolkestein, C. de Groot, and J. L. Mackenzie(Eds.), *Syntax and Pragmatics in Functional Grammar.* Dordrecht, Foris Publications. 50-63.

Hannay, M. 1991. Pragmatic Function Assignment and Word Order Variation in a Functional Grammar of English. *Journal of Pragmatics.* 16: 131-155.

Hajicová, E. 1994. Topic/Focus and Related Research. In P. A. Luelsdorff (Ed.), The Prague School of Structural and Functional Linguistics. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 246-275.

Harold, B. B. 1995. Subject-verb Word Order and the Function of Early Position. In P.

Downing and M. Noonan (Eds.). Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 137-161.

Herring, S. 1990. Information Structure as a Consequence of Word Order Type. *The Sixteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, 163-174.*

Herring, S. C. and J. C. Paolillo. 1995. Focus Position in SOV Languages. In P. Downing and M. Noonan (Eds.). Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 163-198.

Hetzron, R. 1970. Nonverbal Sentences and Degrees of Definiteness in Hungarian. *Language.* 46(4): 899-927.

Hetzron, R. 1971. Presentative Function and Presentative Movement. Studies in African Linguistics, Supplement. 2: 75-105.

Hetzron, R. 1975. The Presentative Movement or Why the Ideal Word Order Is V.S.O.P. In C. Li (Ed.), *Word Order and Word Order Change.* 347-388, University of Texas Press. 347-388.

Hinds, J. 1983. Topic Continuity in Japanese. In T. Givón (Ed.), *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study.* Amsterdam, John Benjamins. 43-93.

Hinds, J. 1987. Thematization, Assumed Familiarity, Staging, and Syntactic Binding in Japanese. In J. Hinds, S. Maynard and I. Shoichi (Eds.). Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 83-106.

Hinds, J., S. K. Maynard, et al. (Eds.). 1987. *Perspectives on Topicalization: The Case of Japanese WA.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.

Hinds, J and W. Hinds. 1979. Participant Identification in Japanese Narrative Discourse. In G. Bedell, E. Kobayashi and M. Muraki (Eds.), *Explorations in Linguistics.* Tokyo, Kenkyusha. 201-212.

Iwasaki, S. 1987. Identifiability, Scope-setting, and the Particle WA: A Study of Japanese Spoken Expository Discourse. In J. Hinds, S. Maynard and I. Shoichi (Eds.). Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 107-141.

Jarvella, R. J. 1979. Immediate Memory and Discourse Processing. In G. H. Bower (Ed.^Eds.), *The Psychology of Learning and Motivation.* 379-421.

Keenan, E. L. 1971. Two Kinds of Presupposition in Natural Language. In C. Fillore and D. T. Langendon (Eds.), *Studies in Linguistic Semantics.* New York, Rinehard and Winston. 45-52.

Keenan, E. O. and B. B. Schieffelin. 1976. Topic as a Discourse Notion: A Study of Topic in the Conversations of Children and Adults. In C. Li (Ed.), *Subject and Topic.* New York, Academic Press. 335-384.

Keizer, M. E. 1990. A Typology of Copular Sentences. *Linguistics.* 28: 1047-1060.

Keizer, M. E. 1991. A Typology of Copular Sentences: Response to Declerck (1991). *Linguistics.* 29: 537-542.

Kintsch, W. 1974. *The Representation of Meaning in Memory.* Hillsdale, Lawrence Erlbaum Associates.

Kuno, S. 1971. The Position of Locatives in Existential Sentences. *Linguistic Inquiry.* 2(2): 333-378.

Kuno, S. 1972. Functional Sentence Perspective: a Case Study from Japanese and English. *Linguistic Inquiry.* 3: 269-320.

Lambrecht, K. 1987. On the Status of SVO Sentences in French Discourse. In R. S. Tomlin (Ed.), Coherence and Grounding in Discourse. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 217-261.

Lambrecht, K. 1988. Presentational Cleft Constructions in Spoken French. In J. Haiman and S. A. Thompson (Eds.), *Clause Combining in Grammar and Discourse.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 135-179.

Lambrecht, K. 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of discourse Referents.* Cambridge, Cambridge University Press.

LaPolla, R. J. 1995. Pragmatic Relations and Word Order in Chinese. In P. Downing and M. Noonan (Eds.). Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 297-329.

Li, C. N. and S. A. Thompson. 1975. The Semantic Function of Word Order: A Case Study in Mandarin. In C. N. Li (Ed.), *Word Order and Word Order Change.* Austin/London, University of Texas Press. 163-195.

Li, C. N. and S. A. Thompson. 1976. Subject and Topic: A New Typology of Language.

In C. Li (Ed.), Subject and Topic. New York, Academic Press. 457-489.

Mithun, M. 1987. Is Basic Word Order Universal?. In R. Tomlin (Eds.), *Coherence and Grounding in Discourse.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 281-328.

Myhill, J. 1992. *Typological Discourse Analysis.* Oxford, Blackwell.

Nuyts, J. 1985. Some Considerations Concerning the Notion of 'Psychological Reality' in Functional Grammar. In A. M. Bolkestein, C. de Groot and J. L. Mackenzie (Eds.), *Syntax and Pragmatics in Functional Grammar.* Dordrecht, Foris Publications. 91-105.

Oberlander, J. and J. Delin. 1996. The Function and Interpretation of Reverse WH-Clefts in Spoken Discourse. *Language and Speech.* 39(2-3): 185-227.

Prince, E. F. 1978. A Comparison of WH-clefts and IT-clefts in Discourse. *Language.* 54(4): 883-906.

Prince, E. F. 1981. Toward a Taxonomy of Given-New Information. In P. I. Cole (Ed.), *Radical Pragmatics.* London, Academic Press. 223-255.

Prince, E. F. 1985. Fancy Syntax and 'Shared Knowledge'. *Journal of Pragmatics.* 9: 65-81.

Prince, E. F. 1986. On the Syntactic Marking of Presupposed Open Propositions. *Chicago Linguistic Society* 22. Papers from the Parasession on Pragmatics and Grammatical Theory. : 233-259.

Prince, E. F. 1988. Discourse Analysis: A Part of the Study of Linguistic Competence. In F. J. Newmeyer (Ed.), *Linguistics: The Cambridge Survey Vol 2, Linguistic Theory: Extensions and Implications.* Cambridge, Cambridge University Press. 164-182.

Prince, E. F. 1992. The ZPZ Letter: Subjects, Definiteness, and Information-status. In W. C. Mann and S. A. Thompson (Eds.), *Discourse Description: Diverse Linguistic Analyses of a Fund-Raising Text.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 295-325.

Ramsay, V. 1987. The Functional Distribution of Preposed and Postposed "IF" and "WHEN" Clauses in Written Discourse. In R. S. Tomlin (Ed.), *Coherence and Grounding in Discourse.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 383-408.

Rochemont, M. S. and P. W. Culicover. 1990. *English Focus Constructions and the Theory of Grammar.* Cambridge, Cambridge University Press.

Seiichi, M. 1982. Japanese Grammar and Functional Grammar. *Lingua.* 57: 125-173.

Siewierska, A. 1991. *Functional Grammar.* London/New York, Routledge.

Stubbs, M. 1983. *Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language.* Oxford, Blackwell.

Sun, C. F. and T. Givón. 1985. On the So-called SOV Word Order in Mandarin Chinese: A Quantified Text Study and Its Implications. *Language.* 61(2): 329-351.

Thompson, C. L. 1990. On the Treatment of Topical Objects in Chepang: Passive or Inverse?. *Studies in Language.* 14(2): 405-427.

Thompson, S. A. 1985. Grammar and Written Discourse: Initial and Final Purpose Clauses in English. In T. Givón (Ed.), *Quantified Studies in Discourse.* special volume of Text.

Thompson, S. A. 1987. "Subordination" and Narrative Event Structure. In R. S. Tomlin (Ed.), *Coherence and Grounding in Discourse.* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 435-454.

Tomlin, R. 1985. Foreground-Background Information and the Syntax of Subordination. In T. Givón (Ed.), *Quantified Studies in Discourse.* special volume of Text.

van Dijk, T. A. 1977. *Text and Context: Explorations in the Semantics and Pragmatics of Discourse.* London, Longman.

van Dijk, T. A. 1982. Episodes as Units of discourse Analysis. In D. Tannen (Ed.), *Analyzing Discourse: Text and Talk.* Washington D. C., Georgetown University Press. 177-195.

van Dijk, T. A. and W. Kintsch. 1983. *Strategies of Discourse Comprehension.* Orlando, Academic Press.

（日本語文献：５０音順）

青木三郎 (1995)「取立てと主題－日仏語の対照言語学的研究」　益岡隆志, 野田尚史, 沼田善子編『日本語の主題と取立て』 東京, くろしお出版. 277-298.

天野みどり (1995a)「『が』による倒置指定文－『特におすすめなのがこれです』という文について－」 『新潟大学人文科学研究』 88: 1-21.

天野みどり (1995b)「後項焦点の『ＡがＢだ』文」 『新潟大学人文科学研究』 89: 1-24.

天野みどり (1996)「後項焦点の名詞述語文－『は』と『が』の考察の基点－」 『和光大学人文科学紀要』 31(10): 1-10.

天野みどり (1998)「『前提・焦点』構造からみた『は』と『が』の機能」 『日本語科学』 3: 67-84.

庵功雄 (1997.2)「国語学・日本語学におけるテキスト研究」 平成８年度文部省科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）研究成果報告書『言語とコミュニケーションに関する研究概観』48-70.

池上嘉彦 (1983)「テクストとテクストの構造」国立国語研究所編『談話の研究と教育Ｉ』 東京, 大蔵省出版局. 7-41.

伊藤晃 (1992a)「日本語の分裂文の談話における機能」 『さわらび』 (1): 1-22.

伊藤晃 (1992b)「日英語の分裂文の対照研究－焦点化可能な要素に関する制約を中心に」『語法研究と英語教育』77-86.

伊藤晃 (1995)「分裂文・疑問文・ウナギ文」 『さわらび』 4: 9-21.

井上和子 (1979)「A Study of Discourse Initial Sentences」 昭和54年度科研費特定研究（１）研究成果報告書『日本語の基本構造に関する理論的実証的研究』37-56.

井上秀剛 (1995)「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」 『言語文化研究』 21: 97-116.

鬼山信行 (1993)「指示と叙述：文の諸構造間の対称性について」小松英雄博士

退官記念日本語学論集編集委員会編『日本語学論集』 東京, 三省堂 .752-741.

尾上圭介 (1973)「文核と結文の枠－『ハ』と『ガ』の用法をめぐって－」 『言語研究』 63: 1-26.

尾上圭介 (1977)「提題論の遺産」 『言語』 6(6): 20-29

尾上圭介 (1977)「語列の意味と文の意味」村松明教授還暦記念会編『国語学と国語史』 東京. 987-1004.

尾上圭介 (1979)「助詞『は』研究史に於ける意味と文法」神戸大学文学部三十周年記念論集』

尾上圭介 (1981)「『は』の係助詞性と表現的機能」 『国語と国文学』 58(5): 102-118.

尾上圭介 (1995)「『は』の意味分化の論理－題目提示と対比－」 『言語』 24(11): 28-37.

神尾昭雄, 高見健一 (1998)『談話と情報構造』研究社.

上林洋二 (1984)『措定と指定---ハとガの一面』修士論文, 筑波大学.

上林洋二 (1988)「指定文と措定文」 『文藝言語研究（言語編）』 14: 57-74.

菊地康人 (1997)「『が』の用法の概観」渡辺実博士古希記念論集編集委員会編 『日本語文法－体系と方法』 東京, ひつじ書房. 101-123.

久野 暲(1973)『日本文法研究』東京, 大修館書店.

久野暲(1978)『談話の文法』東京, 大修館書店.

熊本千明 (1989)「指定と同定－『・・・のが・・・だ』の解釈をめぐって－」 大江三郎先生追悼論文集編集委員会編『英語学の視点』 福岡, 九州大学出版会. 307-318.

熊本千明 (1989)「日・英語の分裂文について」 『佐賀大学英文学研究』 17: 11-34.

熊本千明 (1992)「日・英語のコピュラ文に関する一考察」 『佐賀大学英文学研究』 20: 49-67.

熊本千明 (1993)「The Referential/Attributive Distinction and the Classification of Copular Sentences」福岡言語学研究会編『言語学からの眺望』 福岡, 九州大学出版会. 475-489.

熊本千明 (1994)「It-Cleftsの解釈をめぐって」 『佐賀大学英文学研究』 22: 17-36.

斉藤武生 (1992)「談話研究へのアプローチ」 平成2年度・3年度文部省特定研究経費研究成果報告書『談話研究の諸相』1-6.

佐伯哲夫 (1975)『現代日本語の語順』東京, 笠間書院.

佐伯哲夫 (1976)『語順と文法』大阪, 関西大学出版部.

佐伯哲夫 (1983)「語順と意味」 『日本語学』 2(12): 30-38.

佐伯哲夫 (1998)『要説日本語の語順』東京, くろしお出版.

坂原茂 (1990)「役割、が・は、ウナギ文」日本認知科学会編『認知科学の発展』東京, 講談社.

坂原茂 (1990)「同定文・記述文とフランス語のコピュラ文」 『フランス語学研究』 24: 1-13.

佐治圭三 (1991)『日本語の文法の研究』東京, ひつじ書房.

定延利之 (1995)「心的プロセスから見た取立て詞」益岡隆志, 野田尚史, 沼田善子編『日本語の主題と取立て』 東京, くろしお出版. 277-160.

佐藤ちゑこ (1981)「日本語の分裂文」安井稔博士還暦記念論文集編集委員会編『現代の英語学』東京, 開拓社. 538-546.

柴谷方良 (1990)「助詞の意味と機能について－『は』と『が』を中心に－」国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会編『文法と意味の間』東京, くろしお出版. 281-301.

砂川有里子 (1992)「談話における分裂文の機能について」 『第１回小出記念日本語教育研究会論文集』 59-81.

砂川有里子 (1994)「Word Order Principles in Japanese Cleft Constructions: 'A no wa B da' and 'A no ga B da'」 平成５年度科学研究費補助金一般研究（A）

研究成果報告書『個別言語学における文法カテゴリーの一般化に関する理論的研究』 70-79.

砂川有里子 (1994)「コンテクストと文の形式－『～は～だ』と『～が～だ』をめぐって」『第７回日本語教育連絡会議報告発表論文集』 125-131.

砂川有里子 (1995)「語順と特立提示機能に関する試論－新規項目導入形式を手がかりとして－」『第４回小出記念日本語教育研究会論文集』99-112.

砂川有里子 (1995)「談話主題の導入形式に関する研究ノート－存在文とコピュラ文の特立提示機能について」『文藝言語研究（言語篇）』 28: 41-51.

砂川有里子 (1995)「日本語における分裂文の機能と語順の原理」仁田義雄編『複文の研究（下）』 東京, くろしお出版. 353-388.

砂川有里子 (1996)「日本語コピュラ文の類型と機能－記述文と同定文」上田功他編『言語探求の領域』 東京, 大学書林. 261-273.

砂川有里子 (1996)「日本語コピュラ文の談話機能と語順の原理－『ＡがＢだ』と『ＡのがＢだ』構文をめぐって－」『文藝言語研究（言語篇）』 30: 53-71.

高見健一 (1995)『機能的構文論による日英語比較－受け身文、後置文の分析－』東京, くろしお出版.

高見健一 (1995)『日英語の右方移動構文－その構造と機能－』東京, ひつじ書房.

竹沢幸一, J. Whitman (1998)『格と語順と統語構造』東京, 研究社.

陳訪澤 (1997)「日本語の分裂文とウナギ文の形成について」『世界の日本語教育』 7: 251-267.

土屋俊 (1996)「言語の開かれた概念を求めて」『言語』 25(4): 76-83.

角田太作 (1991)『世界の言語と日本語』東京, くろしお出版.

坪本篤朗 (1992)「現象（描写）文と提示文」文化言語学編集委員会編『文化言語学』 東京, 三省堂. 578-564.

坪本篤朗 (1993)「関係節と疑似修飾－状況と知覚－」『日本語学』 12(2): 76-87.

坪本篤朗 (1995)「文連結と認知図式－いわゆる主要部内在型関係節とその解釈－」『日本語学』14(3): 79-91.

坪本篤朗 (1997)「文のタイプと日本語『ト書』連鎖」『人文論集』48(1): 311-324.

寺村秀夫 (1978)『日本語の文法（上）』大蔵省印刷局.

寺村秀夫 (1987)「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』6(3): 56-68.

東郷雄二 (1988)「Mon frère, il est linguiste et le coupable, c'est lui.－代名詞ILとCEの用法について－」『フランス語フランス文学研究』53: 102-111.

東郷雄二 (1989)「フランス語の話し言葉の特徴－談話方略を中心に－」平成７～９年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』1-33.

東郷雄二 (1991)「フランス語の＜指示形容詞CE+名詞句＞照応－談話における情報と視点－」『人文』37: 92-112.

東郷雄二 (1998.3)「談話モデルと指示」平成７～９年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』34-57.

永野賢 (1965)「文章における『が』と『は』の機能」『日本語教育』7: 32-47.

永野賢 (1972)『文章論総説』東京, 朝倉書店.

中右実 (1984)「文の構造と機能」安井稔他編『意味論』東京, 大修館. 548-626.

西山佑司 (1978)「意味することと意図すること」『理想』78-11(546): 93-107.

西山佑司 (1979)「新情報・旧情報という概念について」昭和54年度科学研究費補助金研究報告『日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』127-151.

西山佑司 (1982)「語用論的前提をめぐって」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』14: 81-105.

西山佑司 (1983)「語用理論における関連性－Wilson & Sperberのアプローチをめ

ぐってー」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』15: 161-183.

西山佑司 (1985)「措定文、指定文、同定文の区別をめぐって」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 17: 135-165.

西山佑司 (1988)「指示的名詞句と非指示的名詞句」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』20: 113-134.

西山佑司 (1989)「『象は鼻が長い』構文について」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 21: 107-133.

西山佑司 (1992)「役割関数と変項名詞句－コピュラ文の分析をめぐってー」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』24: 193-216.

西山佑司 (1993)「『ＮＰ１のＮＰ２』と“ＮＰ２　of　ＮＰ１”」 『日本語学』12(11): 65-71.

西山佑司 (1993)「コピュラの用法とメンタルスペース理論」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』25: 49-82.

西山佑司 (1994)「日本語の意味と思考---コピュラ文の意味と構造を手がかりに---」 『日本語論』2(5): 70-93.

西山祐司 (1990)「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって」国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会編『文法と意味の間』 東京, くろしお出版. 133-148.

仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』東京, ひつじ書房.

丹羽哲也 (1988a)「有題と無題文、現象（描写）文、助詞『が』の問題（上）」『國語國文』 57(6): 41-58.

丹羽哲也 (1988b)「有題と無題文、現象（描写）文、助詞『が』の問題（下）」『國語國文』 57(7): 29-49.

野田尚史 (1985)『はとが』東京, くろしお出版.

野田尚史 (1995)「文の階層構造から見た主題ととりたて」益岡隆志, 野田尚史, 沼田善子編『日本語の主題と取立て』 東京, くろしお出版. 1-35.

野田尚史 (1996)『「は」と「が」』東京, くろしお出版.

馬場俊臣 (1986)「『主要語句の連鎖』と『反復語句』との交渉」永野賢編『文章論と国語教育. 東京, 朝倉書店.68-83.

林四郎 (1990)「文の成立事情－文章論的文論への序説」『国語学』160: 40-50.

福地肇 (1985)『談話の構造』東京, 大修館書店.

藤井洋子 (1991)「日本語における語順の逆転－談話語用論的視点からの分析－」『言語研究』99: 58-81.

藤井洋子 (1996)「日本語の語順の逆転について－会話の中の情報の流れを中心に－」高見健一編『日英語の右方移動構文』東京, ひつじ書房. 167-198.

ベケッシュ, アンドレイ (1995)「日本語における照応の語用論－より広い指示手段系列におけるコノとソノ」仁田義雄編『複文の研究（下）』東京, くろしお出版. 481-509.

ベケッシュ, アンドレイ (1995)「文脈から見た主題化と『ハ』」益岡隆志, 野田尚史, 沼田善子編『日本語の主題と取り立て』東京, くろしお出版. 155-174.

堀口和吉 (1995)『「～は～」のはなし』東京, ひつじ書房.

益岡隆志 (1995)「連体節の表現と主名詞の主題性」益岡隆志, 野田尚史, 沼田善子編『日本語の主題と取立て』東京, くろしお出版. 139-153.

益岡隆志, 野田尚史, 沼田善子.編 (1995)『日本語の主題と取り立て』東京, くろしお出版.

三上章 (1953)『現代語法序説』刀江書院（くろしお出版より復刊）.

三上章 (1960)『象は鼻が長い』東京, くろしお出版.

山梨正明 (1992)『推論と照応』東京, くろしお出版.

渡辺真一郎 (1979)「日本語の分裂文について」林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会編『英語と日本語と』東京, くろしお出版. 405-423.